
FAIRYTAILの世界へ

短剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A I R Y T A I L の世界へ

【Zコード】

Z2645S

【作者名】

短剣

【あらすじ】

神の不手際で死んだ主人公はお詫びとしてF A I R Y T A I L の世界に転生する。

* * * この小説は一次創作です。ご都合主義・オリ主最強・不定期更新などの成分が含まれているのでご注意ください。

プロローグ

今俺の目の前には神様と名乗る少女がいる。何でも俺は女の子が車にひかれそうになつたのを助け、車にひかれてしまい、死んだそうだ。

「で何で俺がここに居るわけ?」

「いやそれは・・・」

「俺は助かる筈だったとか言わないよな?」

「ははは・・・」

「どうしてくれんだよ!――まだやりたい」とあつたの。

「だからここに連れてきたんだよ。」

「転生をしてくれんの?」

「そうだよ。」

「ふ～ん。じゃあFAIRYTALEの世界ね。」

「それだけでいいの?」

「強いて言えば記憶がなくならなによつてはじめてほしとのと、病弱な体は勘弁。」

「本当にそれだけでいいの?他にFAIRYTALEの世界の魔法を全部使えるようにもできるけど?」

「そんなことしたらつまらない。その代わり、無から物質を作り出す魔法と、Fateの無限の剣製、なんかオリジナルの滅竜魔法を使えるようにして。」

「十分チートな気がするけどいいか。それじゃあ送るよ。」

「おひ。」光に包まれ俺の意識は切れた。

「うへ、ここは？」目が覚め周りを見ると、知らない場所にいた。「転生できたみたいだな。傷を手当してした跡があるけど何か怪我でもしたか？」

「あら、気が付いたみたいね。」話しかけてきたのはフェアリーテイルの看板娘・ミラジエーンだった。

「あの・・・俺は一体？」

「女の子なのに俺って珍しいわね。あなたが傷だらけの体でギルドの前に倒れてからナツ達が医務室に連れてて治療したの。」

「えっ？」女の子だつて？

「何も覚えてないの？」何か勘違いされてるが、

「記憶が、混乱してて。覚えてるのは、自分が使える魔法だけで・」

「...あなた魔法が使えるの？だったらフェアリーテイルに入らない？記憶喪失だつたらここで魔法を使っていくうちに思い出すかも知れないし・・・」

「えつ？いいんですか？」

「あなたなら皆大歓迎してくれると思うわ。」

「ありがとうございます。」

「ミラ、入つてもいいか？」

「いいわよ。」

「気が付いたんだな。」

「あい。」

「猫が喋った！」

「そんな事より何でそんな服着てんだ？」「今着てる服はフードがついてるパークーか。」

「え？と何でだつたかな？」

「ナツこの子記憶が混乱してるみたいなの。」

「ナツ？俺を助けてくれた人？」

「そうだぞ。」

「服の事なら覚えてる。」なぜか服の事だけ記憶が出てきた。

「そう。」

「確かに何かがあるから隠さないといけないって親に言われた。信用できる人にだけ見せなさいって。」

「そうか。」

「でもナツならいいよ。」

「本当か？」

「助けてくれたから。」パーカーを脱ぐと、ナツ達が絶句してる。
「どうした？・・何これ！？？」鏡で見ると、猫耳と尻尾が生えていた。

チーム結成

「あれ? ナツビ」に行くの?」

「ルーシィの家。」

「面白そう ついてつていい?」

「いいぞ。」

「ありがと。」

ルーシィ side

「ん~、いいトコ見つかったなあ」

私は今お風呂に入っている。

「7万」にしては間取りも広いし、収納スペースも多いし etc

「そして何より一番素敵なのは...」

主人公 side

「ここがルーシィの家?」

「住所的にここのが筈だ。」

「あい」

「じゃ入ろうか。」

玄関の扉を開けたが誰もいなかつた...

「誰もいないね。」

「風呂に入ってるんじゃないかな? · · · 少し」の部屋で待とつ。」

「そうだな。」

「…白い壁…木の香り…」

「お、こつちくるわ」

「いくら一人とはいえあんな大きい独り言は無いよね」

ハッピーが言ひ。

「やして何より一番素敵のは……」

そしてルーシィは扉を開ける

「よつ、ルーシィ」

と、ナツ。

「大きい独り言だね」

と、ハッピー。

「ルーシィ、どんまい。」

と、僕。

「あたしの部屋一つ……！」

と、ルーシィ。

「何でアンタ達がいるのよー！？」

と、ナツとハッピーに回し蹴りをくらわす。

「僕はナツがルーシィの家に行くからついてきた。」

「ルーシィの家が気になったから。」

「だからって勝手に入ってきていい訳!? 親しき仲にも礼儀ありつて……」

一人称が僕になつてるのはミラさんに言葉づかいを治せと言われたからだ。そのときのミラさんの顔は思い出したくないほど怖かつた。

「まだ引っ越してきたばかりで家具もそろつてないのよ。遊ぶモンなんか何もないんだから紅茶のんだらかえつてよね

「残忍な奴だな」

「あい」

「紅茶飲んで帰れって言つただけで残忍…って…」

「あー…そうだ」

ナツが思いついたように声をあげる。

「ルーシィの持つてる鍵の奴等、全部見せてくれよ」

「あ、僕も気になる」

「いやよーすゞく魔力を消耗するじゃない。それに鍵の奴等じゃない
くて星靈よ」

「ルーシィは何人の星靈と契約してるの?」

「6体。星靈は1体、2体つて数えるの」

「へへ。」

「そーいえばハルジオンで買った小犬座の二コラ、契約するのまだ
だつたわ。……ちょうどよかつた! 星靈魔導師が星靈と契約する流
れを見せてあげる」

「おおつー。」

「血判とかおすのかな?」

「いたそだなケツ」

「なぜお尻…まあいいわ。とつあえず今から星靈との契約するから見てて」

「我…星靈界との道をつなぐ者…汝…その呼びかけに応え門をくぐれ…」

そして鍵の先端から光ができる。

「おお…」

「開け！小犬座の扉…！…！」

目の前が光と煙で真っ白になる。

出できたのは、

「ブーン…！…！」

真っ白な体をして鼻にドリルみたいのがついてる謎の生命体だった。

『二二二ラーニー…』

皆ハモる。

「ビ…ビ…まい…！」

「失敗じゃないわよー！…」

「まあまあ、早く契約しようよ。流れも知りたいし」

「うん…じゃ、契約に移るわよ」

星靈魔導士の契約方法はいたつて簡単なものだつた。

ただ呼び出していい日を聞くだけだ。

だけどそれは契約を重んじる星靈魔導士にとってはとても大切なも
のなのだ。

「はいっ…契約完了…！」

「ププーン…！」

ルーシィとニーハの契約が完了した。

「そうだ！名前決めてあげないと…」

「あれ？二コラつて名前じゃないの？」
ハッピーが問う。

「それは総称。……そうだ！おいで！ブルー！」

「プーン！」

「ブルう？」

と、ナツ。

「なんか語感がかわいいでしょ。ね！ブルー」

「ブーン」

「そういえばプルーって小犬座なのにワンワン鳴かないんだ」

「それもそうだな」

ハッピーとナツが語る

「いや、ハッピーもにゃーにゃー鳴かないじゃない」

そしてプルーは何か伝えるかのように踊り出す。

「ん?なんだなんだ?」

最後に両手で丸を作る。

「プルー！お前良いこと書つなあつ！！」

「なんか伝わってるし！－！」

「うーん…ルーシイは頼れるし、いい奴だ…」

そしてナツは何か考え始めた。

「ナツ? デウしたの?」
ハッピーが言いつ。

すると突然、

「よし！決めた！！プルーの提案に賛成だ！」

「？」

そしてナツはいつ言った。

「オレたちでチームを組もう！――」

「チーム？」

「あい！！オイラが説明するね」

ハッピー先生のフェアリー・テイル講座出張版が始まった。

チームというのは、

ギルドのメンバーの中でも特に仲のいい人同士が集まって結成する
ものらしい。

また、一人では難しい依頼もチームを組めば負担が減る、
ということらしい。

「いいわね！それ！！おもしろそう！」

と、ルーシィは賛成した。

「面白そう 僕も入る。」

「よおおしー決定だーっ！－早速仕事いくぞーっ！－

「せつかちなんだからー」
と、何故か上機嫌なルーシィ。

仕事の内容は…

エバルー公爵の本を一冊取り扱い、とこいつ内容だ。
ちなみに20万円。

ただいま金髪のメイド募集集中だそうだ。

「はじめられたーっ……」

ルーシイが言ひ。

「どんまい、ルーシイ。…金髪じゃなくてよかつた」

ちなみに私の髪はショートの黒髪だ。

「なにいつてんだ? もつとよくみるよ」

ナツは募集要項の下の方を指さす。

今は黒髪のメイドさんも募集中、なんて事がかかれていた。

「…僕まだ5歳なんだけど。」

「「そうだったのか」――? ?」

「ナツ、見つかったか？」

「いや、燐どこ行つたんだ？」

「んな事よりエルザが来るまでに見つけ……」

「お前たち何をしてるんだ？」

「「エルザ！」」

「んつ？燐はどうした？」

「いなくなってしまった。」

「燐が急に起きたと思つたらそのままどこかに行つたんだ。」「燐・・・」

SIDE 燐

（燐大丈夫？）

（大丈夫じゃないかも。）

（記憶消すんだつたら消せるよ？）

（せつからく記憶が戻つたんだから消したくないよ。）

（燐・・・）

（仕事ナツ達で行つてるのかな？）

（皆燐の事探してるよ。）

（転生するときに調子に乗るから」「んなことになるんだよね。）

（燐、魔力借りるよ？）

（勝手にして。）

体から力が抜ける感じがし、次に、誰かに抱きしめられた。

「つー放せ。」

「燐ごめんね。」

「何で謝るの？」

「私のミスで燐が死んじゃったから。」

「もういいよ。このまま旅に出ようかな。」

「フュアリーテイルはどうするの?」

「もう誰も信じない。」

「燐・・・」

「だつて、僕の親が死んだ後、村の人は冷たくなったしね。」

「・・・」

「どうせ皆も冷たくなるよ。」

「燐、見つけたぞ!」

「ナツ・・・」

「帰るぞ。」

「僕は帰らない。」

「燐!?」

「どうせ皆村の人と一緒にになるよ。」

「記憶が戻ったのか!」

「戻ったよ。だから帰りたくないんだよ。」

「どうしてだ?」

「それは・・・」

「僕が生まれる前、父さんと母さんが化け猫を討伐したんだ。」

「でも、化け猫が死ぬ直前に母さんに呪いをかけたんだ。」

「その呪いは生まれて来る子供が化け猫の特徴を受け継ぐものだつたんだ。」

「燔は…」

「分かつた？生まれて来た子供が僕。化け猫の特徴を受け継いでね。」

「生まれた時、両親以外に村人がいたんだ。皆僕を殺そうとしたんだけど、両親が守ってくれたおかげで殺されずにすんだけどね。」

「それで両親と3人幸せに暮らしてたんだけど、両親2人で仕事に行つた時、ドラゴンに会つて殺された。」

「その時から村人全員の態度が変わった。」

「会うたびに石を投げられたり、罵声を浴びせられた。酷い時には犯されそうになつた。魔法が使えたから大丈夫だつたけど。」

「それでこんな生活が続くくらいなら村を出た方が良いと思つて村を出たんだ。」

「村を出てしばらくたつた時に誰かに襲われて怪我した時に会つたのがナツだつたんだ。」

「それのどじが戻らない理由になるんだ?」

「此処まで言つてまだ分からない? フェアリー・テイルの皆も同じになるからだよ。」

「燐、それ本氣で言つたのか?」

「そうだよ。」

そう言つた瞬間、ナツに殴られた。

「なにすんだ! ! !」

「ギルドの皆はそんな奴等、じゃねえ! ! !」

「ナツに何が分かるんだよ! ! !」

「俺も親がいねえ。」

「! ?」

「ドラゴンのイグニールに言葉と魔法を教えてもらつた。急に居なくなつちましたけど、爺っちゃんに誘われてフェアリー・テイルに入つた。」

「皆優しくて家族みたいなもんだからそれを悪く言つ奴は許さねえ! ! !」

「ナツ・・・」

(燐、あなたが人を信じられないのも分かるけど、この人達は裏切らないじゃない?)

(そりやない?)

(絶対とは言えないけど、燐を探してくれたんだよ。信じてあげたら?)

(そうだね。)

「ナツ、ごめん!」

「せつかく探してくれたのに酷い事言つちやつて。」「頭に血が昇つてたみたい。」

「でももう大丈夫! ナツに殴られたおかげで目が覚めたよ。」

「それじゃあ帰るか。
「うんー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2645s/>

FAIRYTAILの世界へ

2011年11月21日11時37分発行